

メアリ・ウルストンクラフト研究(第2報)

- 英国18世紀の教育制度と女子教育 -

堀出 稔

A Study of Mary Wollstonecraft (): The Educational System and Women Education of Eighteenth-Century Britain

Minoru HORIDE

メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft)の生涯は短く、1759年に誕生して1797年に世を去っている。わずか38年の生涯であったが、イギリス国内では1767年頃から産業革命が起こり、社会が変貌しつつあった。海外では1789年にフランス革命が勃発し、自由・平等・博愛の旗の下民衆が人間の権利を主張し、フランス王室を打倒し、騒然とした変革の時代であった。メアリはこの二つの時代精神と、父権制の時代のため母親が父親に絶対服従し、女性が泣いている家庭環境の影響によってこれからの女性はどうかを問い続け、女性擁護論の著作12冊と翻訳を残していった。

この小論では、メアリがイギリス18世紀女子教育をどのように考え、またどのようなべきかを考察する。考察の順は、イギリスの18世紀の教育制度、寄宿学校と女子教育、慈善学校と女子教育、メアリ・ウルストンクラフトの女子教育論とその展望である。

イギリスにおいては17世紀後半に考慮が重ねられ、18世紀に新たに登場する各種初等・中等教育は、労働学校(Labor School) 慈善学校(Charity School) 日曜学校(Sunday School) デーム・スクール(Dame School) プライベート・アドベンチャー・スクール(Private Adventure School) 助教法学校(Monitorial School) 女子寄宿学校(Seminary for Young Ladies)¹ などがある。17世紀後半から18世紀にかけイギリスは重商主義²の時代を迎え、労働力の確保は子供の力も借りなければならぬ程になった。そこで労働学校は労働者階級の子供たちが幼年より労働に従事しつつ、学べる施設である。カリキュラムの中心が紡績、編み物、裁縫、園芸、木工等職業教育であり、読み書きは二の次であった。また、慈善学校はキリスト教知識普及協会によって設立され、貧民の子弟救済を目的としていた。

1789年の女子慈善学校の教科書を見ると、糸紡ぎ、針仕事、パン焼き、洗濯、掃除、食器磨きなどが中心で、これに初歩的な読み書きが加わり、あとは、衣服、手足、髪を洗って身なりを整えておきなさいとか、嘘をついたり、人のものを盗んだり下品な言葉を使ったりしてはいけませんといったことである。³

すなわち、すぐ役立つ実用的な仕事と礼儀作法とキリスト教による道徳教育に重点が置かれた。日曜学校、デーム・スクール及びプライベート・アドベンチャー・スクール、助教法学校は、1767年頃産業革命による社会変革が進み、産業が熟練者による手工業から工場生産に移行する

時期大量の労働力が必要になり、下層階級の児童や女性が工場労働に従事するようになった。児童の学習時間はどんどん縮小され、読み書きなどをゆっくり学習する時間がなくなってきた。代わりに日曜学校、デーム・スクール及びプライベート・アドベンチャー・スクール等で一週間に数時間程度の簡便な基礎教育とキリスト教に基づく道徳教育を受けることになった。また、助教法学校においては、教師不足・資金不足を補うために比較的優秀な生徒に学習指導を手伝わせ、効率よく授業を進め、一度に多くの生徒を学習させる方法を取った。

さらに、18世紀の新たな教育企画として男子のための文法学校(Grammar School)とは別に、女子寄宿学校が設置された。男子の文法学校は歴史と伝統を誇り、イギリスにキリスト教が聖オーガスティンによって布教が開始された頃、すなわち6世紀には存在していた。その後18世紀後半、繁栄を続ける文法学校はパブリック・スクール(Public School)へと変貌するが、女子寄宿学校は男子のパブリック・スクールを模倣した形で発展し、18世紀多いに繁栄した。授業料の高いものから低いものと様々な寄宿学校があったが、平均的に中流階級以上の家庭の子女が教養と礼儀作法の教育を受けるため入学した。その教育目標は「淑女のたしなみ」を徹底的に指導することであり、良妻賢母教育であった。働き者の中流階級の人々は社会における上昇志向も強く、上流階級を憧れの対象とし、娘には是非少しでも上の階層に嫁ついでほしいと思い、女子寄宿学校に入れるのであった。

たしなみは万人の賞賛の的となっている通り、価値のあるもののように思われる。たしなみの中には、社交界に仲間入りするための入場券になるということで別の価値を持っているものがある。また、若い婦人が結婚において幸運をつかむ機会を増やすと思われるために、また別の、一層の高い価値を持っている。⁴

女子寄宿学校の6ヵ年の教育は保護者にとって娘たちの社会への登竜門であった。しかし、この一見華やかに見える寄宿学校も多くの問題を抱えていた。

中流階級の上昇志向に支えられて18世紀に益々繁栄した女子寄宿学校は、教育経験のある婦人が主に経営し、10人から20人程度の生徒をわずか、年間当時の貨幣価値で10数ポンドから30ポンドの授業料を保護者から徴収した。この費用は当時労働者が半年働く費用に相当し、当然中流階級以上でないとしても在籍は無理であった。しかし、娘の将来を考えて小商人や職人たちも無理をしてでも競って入学させた。女子寄宿学校の教育目標である「淑女のたしなみ」であるが、もし女主人となれば労働は召使にさせるのが慣わしであり、当時召使が多いほどその家は格式があり繁栄を誇っている象徴であった。まず、召使をうまく使って家の管理を円滑に運営することを学ばねばならない。その上で、裁縫、刺繍など家政の一通りの技術、フランス語、イタリア語、音楽などの言語、芸術、社交ダンス、幅広い知識と礼儀作法など修得することである。しかし、このような知識や技術を修得し、将来上流階級の家に嫁ついでとして、その上流階級の貴婦人の地位とは果たして中流階級の娘にとって魅力的なものであったのだろうか。ここに一人の貴婦人の日記がある。

土曜日。午前8時起床、化粧のため席に着く。8時 - 9時。1時間半ほどつけば

くろをあちこち動かし、やっと位置を決める。左眉の上に貼付。9時 12時 ティーを飲み、衣裳を着る。12時 - 2時。礼拝堂に行く。善男善女多し。・・・3時 - 4時。正餐 - 6時。食卓から立ち上がる前にキティー夫人立ち寄り、オペラに誘われる。ティーを飲む。従僕の一人を解雇。ジーニーへの態度が無作法なため。6時、オペラに行く。第2幕開始までフロース氏見かけず。フロース氏は私を席まで案内。氏は私の手を強くにぎってくれたように感ず。夜11時、就寝。憂鬱な夢を見る。⁵

すべての貴婦人が時間をもて余し、化粧や食事に時間をかけ、せつなせつなに歓びを見出し、夫以外の男性との出会いにスリル感じるような生活をしていたわけではないであろうが、家事や育児をほとんど召使にまかせ、自分は楽しみばかり追求する生活に向上的な精神は育まれず、心の隙間が精神的墮落を引き起こすことはないとは言えず、この当時かなりの貴婦人がその状態に陥っていたと言われる。そして、上流社会の女性たちに巢食う怠惰な精神は娘たちを通して女子寄宿学校に伝えられた。

・・・心の問題はほったらかしです。娘たちはのんきに怠けて暮らし、時間を持って余しています。特に裕福な親戚がいる娘たちはたっぷりお金をもらえるので、先生たちに袖の下を使って自分たちを放任してもらうことができます。⁶

メアリは生徒たちが化粧とトランプあそびの賭け事に夢中になっている様子を見て、そこに上流階級の悪徳が受け継がれていることを知り、上昇志向と人生への意欲を持って寄宿学校にやってきた中流階級の娘たちを救いたいと寄宿学校制度を批判する。メアリが批判している状況は男子校であるパブリック・スクールにおいても出来事は変わっても、内容は同じ精神的墮落を引き起こす状況があった。

学校では少年たちはががつ食べ、のらくらと遊ぶ。彼らは家庭的な愛情を培おうとしないで、体が一人前になる前に身体を駄目にしてしまう。・・・私は実際、寄宿学校に嫌悪を感じている。⁷

少年少女たちは寄宿学校の集団生活において、多くの学友を知ることで互いに学び合うことのできる利点があるものの、反面親の監視のない世界で人間集団の中での強者による弱者へのいじめ、先輩の後輩への過度な命令、放蕩などの悪徳に早くから手を染める事実も否定できない。

慈善学校の女子教育を考えてみる。慈善学校は17世紀後半、貧民の子弟の救済を目的として、キリスト教知識普及協会によって設立された。そのため学校に授業料を支払ってまで行くことのできない下層の子供たちが集まった。18世紀に入ると急速に普及し、18世紀中葉には5万人余りに達した。その教育目標は、日常における簡単な読み書きと礼儀作法であり、最も優先されるのはキリスト教による宗教教育であった。

Business now began: the day's Collect was repeated, then certain texts of Scripture were said, and to these succeeded a protracted reading of chapters in the Bible, which lasted an hour. . . . The indefatigable bell now sounded for the fourth time: the classes were marshaled and marched into another room to breakfast. . . .

“ Disgusting! The porridges is burnt again! ”

“ Silence! ” ejaculated a voice; not that of Miss Miller ;⁸

この引用はシャーロット・ブロンテの*Jane Eyre*の一節である。孤児となったジェインはリード夫人の屋敷ゲーツヘッドに引き取られる。しかし、リード夫人の子供たち、ジョン、イライザ、ジョージーナは孤独なジェインを苛め抜く。しかもリード夫人さえも利発ではっきりものを言うジェインを持て余し、何とか屋敷から追い出したいという計画を練る。そこで、リード夫人の知り合いの牧師ブロックルハースト氏に依頼し、彼女を慈善学校のローウッド校に入れることとなった。徹底したキリスト教に基づく道徳教育が行われ、学校生活は、plain fare, simple attire, unsophisticated accommodations, hardy and active habits⁹である。すなわち、質素な生活、簡素な服装、素朴な宿舎、質実剛健な生活態度である。ローヘッド校の運営もすべて寄付によってまかなわれているため、生徒への福利厚生は最低限に抑えられていた。ジェインはこのような貧しい生活の中でも最愛の友ヘレン・バーンズに出会う。ヘレンはやがてチフスで死んでしまうが、ジェインの人生にとって最初のすばらしい人との出会いとなった。*Jane Eyre*の作者シャーロット・ブロンテ自身も1825年8歳の頃、ハワースの地を離れて、数キロ先のカウワン・ブリッジの貧しい牧師の子女のために作られた学校、おそらく慈善学校であったと思われるが、姉のマライヤとエリザベスそして妹のエミリと共に在籍し、不健康な環境と粗悪な食事のため一年後姉2人は結核で世を去り、エミリと彼女は生き残り1年で退学してしまった。このカウワン・ブリッジ(Cowan Bridge)の体験が*Jane Eyre*のローウッド校に反映しているといっても過言ではない。

*Jane Eyre*が書かれたのは1847年と19世紀の中葉であるが、作者のカウワン・ブリッジ体験は1825年であるから、18世紀の教育内容も慣習もすべて継承されていると考えても間違いではないと思われる。

召使に向くようにするために、彼女たちは縫物、編物、麻糸紡ぎ、洗濯、乳しぼり、家の掃除など教わるべきである。さらに万一職を失っても自分で食べていくことができるように、またあとになってから家族を養う助けになるように、この国でこそウーステッドの紡ぎ方をよく教わるべきである。¹⁰

メアリ・ウルストンクラフトの著作には、慈善学校・労働学校などいわゆる下層階級の子弟が学んだ現状には言及がない。彼女の視点は常に自らが所属する中流階級に向けられている。現代から見れば大変片手落ちのように思えるが、それほどイギリスにおける階級間の格差は激しく、特に労働者階級と中流・上流の階級との互いの交流や理解はほとんどなかったのであろう。しかし、それでもなお、彼女の女性擁護の強い意志は200年の時空を越えて現代にも置き換えても、容易に通用するものである。

メアリ・ウルストンクラフトが18世紀のイギリスの学校教育、特に男子及び女子の寄宿学校の現状を知り、厳しい批判を下した背景には、彼女の心の中に学校教育についての理想像を持っているからに相違ない。*Vindication of the Rights of Woman*『女性の権利の擁護』の第12章において「国民教育について」と題する章を設けている。その中には彼女が子供時代に受けた通学学校の良さを述べている。

私は今でも、通学学校のことを楽しく思い出す。少年は、降ろうが照ろうが本を持ち、またかなり学校が遠い場合には、お弁当をもって、朝学校へ、てくてくと歩いてやって来た。この場合、召使が若旦那の手を引くということにはなかった。何故ならば、一度上衣を着てずぼんを穿けば、彼は自分でやれたのであり、また、夕方一人で家に帰り、親の膝もとで、その日の活躍ぶりをとくとくと説明したのだから。父親の家は彼の住みかであり、それは、あとあとまで、懐かしい思い出となっている。¹¹

メアリが寄宿学校の弊害については嫌悪するのは、折角希望に燃えて男子ならパブリック・スクール、女子なら女子寄宿学校に入学するが、やがて学校に蔓延する悪徳に染まり人生を台無しにする若者たちを考えるに忍びないからであろう。彼女が推奨する“通学学校”は子供が物事の判断がしっかりとできる年齢12, 3歳頃までは親の元から通い、親の愛情に包まれて育つことの大切さを述べているようである。また、親は子供が判断のつかない年齢においては良く監視し、非行に走ることを抑制する力となってやるが必要と読み取れる。18世紀においてはまだ小学校は存在しなかったのでここに登場する“通学学校”とは昼間に開かれていた私塾で、生徒は家から通学していたと考えられる。この“通学学校”が19世紀になり小学校として開講され、日本の学校制度にも多大な影響を与えることになり、世界の近代教育の先駆けを象徴したものとなった。

また、彼女は今からおよそ200年以上も前に18世紀の教育の現状を変革するために、男女共学の教育方針を思い描いている。

この実験を行うためには、少年少女が共学で教育されるような、それぞれ年齢に応じた通学学校が、政府によって設立されなければならない。そして、5歳から9歳までの小さい子供のための学校は、全く無料で、すべての階級の子供に開放されていなければならない。また、十分な人数の教師が各校区において特別の委員会によって選ばなければならないし、子供の親は6人が署名すれば、教師の職務怠慢の苦情を何でも訴えることができる。¹²

この男女共学構想はフランスのオタン前司教の公教育に関するパンフレットにヒントを得たと言われる。すでに公教育による5歳から9歳の無料の教育制度とは今で言う義務教育であり、学齢期を変えれば近代から続いてきた今世紀の学校制度の元になるものである。また、特別の委員会とは今各市町村や県に存在する教育委員会であり、18世紀後半にここまで現代と同じような学校制度の構想ができていたとは誠に驚嘆に値する。近代・現代の通学制の初等・中等教

育そのものが18世紀後半から19世紀にかけて実現していく過程を目の当たりにしているようである。このようにメアリ・ウルストンクラフトの思想は、慎み深く、敬虔で、女らしいしとやかさを持ち、男性や夫に素直に服従するようにしいられた18世紀の時代においてさえ、すでに近代・現代の女性の向上した地位と権利を形成していく原動力であったと考えられる。

むすび

今まで、 から にかけてイギリス18世紀の教育制度と女子教育の状況を眺めてきた。男子のための文法学校や聖歌学校 (Song School) が6世紀にはすでに完成されているのに比べ、女子教育はそれぞれの家庭で個人的あるいは上流階級であれば家庭教師の元で行われてはいたが、公教育としては近世を待たねばならなかったことは歴史の大変な損失のようにも思える。

しかし、人間の歩みは現時点であるようであればよかったと理論的に考えるのではなく、様々な因習と時代の流れが大きな波のうねりとなって歴史が継続されて行く中、歴史上これまで築き上げられた女性の地位と権利をさらに向上させるためには常に見守って行く必要があると思われる。

注

1. 田口仁久『イギリス学校教育史』(東京:学芸図書株式会社、1975) p.30.
2. 重商主義とは富みを主として貨幣形態で把握し、国富の増大は外国貿易を通しての富の蓄積と考えた。
3. 青山信吉『世界の女性史』イギリス (東京:評論社、1976) p.144.
4. プリジェット・ヒル著、福田良子訳『女性たちの十八世紀』(東京:1990) p.82.
5. 『世界の女性史』イギリス , p.137.
6. 『女性たちの十八世紀』 p.86.
7. メアリ・ウルストンクラフト著、白井訳『女性の権利の擁護』(東京:未来社、1980) p.300.
8. Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (London: Everyman's Library, 1963) p.39.
9. Ibid. ,p.29
10. 『女性たちの十八世紀』 p.94.
11. 『女性の権利の擁護』 p.301.
12. Ibid. ,p.315.